

研 究 紀 要

(第 67 集一分冊)

看 護 部 会

講 演

「子どもたちをぐんぐん伸ばす言葉かけメソッド」

サードプロデュース代表 NPO 法人 RYOUMA 塾 代表理事

メンタルプロコーチ 津 村 柁 広 …………… 1

研究協議

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた高等学校における看護基礎教育のあり方

発表者 千葉学園高等学校 教諭 相 内 美 羽 …………… 6

青森県立黒石高等学校 教諭 信 濃 幸 …………… 8

助言者 青森県立黒石高等学校 校長 小 野 淳 美

部 会 の 動 き …………… 11

研 究 テ ー マ …………… 12

紀要編集委員 本間 祥子 (千葉学園高等学校)

向山 聡美 (千葉学園高等学校)

令 和 5 年 度

青森県高等学校教育研究会

看 護 部 会

講 演

「子どもたちをぐんぐん伸ばす言葉かけメソッド」

サードプロデュース代表 NPO法人 RYOUMA 塾 代表理事
メンタルプロコーチ 津村 征広 氏

私は、聖愛高校野球部のメンタルコーチをしておりまして、2年目に甲子園に行くという、とても幸運な結果をいただきました。その後、学校や部活動で講演会やセミナーをしたり、企業でのお仕事もいただくようになり、気が付いたらメンタルコーチングの仕事がメインの人生になりました。今日は、実践の中で学んだエッセンスを皆さんにお伝えしたいと思っております。

子供達と対峙する時に何が一番大事かという、僕たちのコンディションです。僕たちの心が乱れていると良いコミュニケーションがとれません。まずは皆さんご自身から心を整えるルーティン（習慣）作りをすると良いと思います。メンタルは強い時と弱い時があり、揺れ動いているから良いのだと思います。「いつもこの場所に自分の心がある。」と固定するのは、むしろ危険です。人間は揺れ動きながら最適なものを見つけていくものだと思います。メンタルが強いか弱いかではなく、「整っているか、整っていないか。」と考えてみてはどうでしょうか。自分でそのやり方を学び、自分で心を整える技があれば、どんな時でも良い方向に向かうことができます。

私たちの心はとても緩んでいる状態からとても緊張している状態までの範囲をいつも揺れ動いているのだと思います。勿論、心が緩んでいる状態の時は、気持ちが入っていないから結果が出しづらいです。だから僕は、「心に張りをつくりましょう。そうしないとパフォーマンスは上がらないよ。」と言ったりします。逆に緊張しすぎてガチガチになっている時は、これもなかなか結果が出しづらいということになります。あまり思い詰めて、「やらなきゃいけない。失敗してはいけない。」と思えば思うほど、体が言うことをきかなくなっていくと、結果的にパフォーマンスが落ちていくのです。僕が子供の頃は、どんどん緊張を与えていき、「それを超えていくのだ。」と指導をする方が多くいました。決してその先には良い結果がなくて、雁字搦めになっていき自分を見失っていくというのは、いろんな方が経験したことではないかなと思います。ですので、「ゆるゆる」でもなく「ガチガチ」でもない心の状態でパフォーマンスしましょうとお勧めしています。

人は、叱られたり罰を与えられる場所では能力を発揮しないとされています。自分を守りたくなり、持っている力を出さなくなるのです。子供達が持っている力を引き出すために最も大切なことは、「安心安全な場作り」です。失敗を許し、思い切ってやってみたことに対して称賛を送ってあげることや、結果ではなくチャレンジしたプロセスに拍手を送る。そういう積み重ねが「のびのびとした空気」を作っていくのではないかと思います。まずは「場作り」が一番大事だと思っております。

脳科学の先生によると、「ワクワクしている脳」は天才脳で、天才性が最も発揮しやすい状態なのだそうです。未来に希望がある時は、我々の心の状態は前向きで、未来を見ているのです。そして、トライしてみようという気持ちが沸き起こります。まさしくこれが天才性ではないかなと思います。こんな気持ちが子供達の心に芽生えたら、先生方の仕事の大半は終わりではないでしょうか。「のびのびとした場作り」と「ワクワクとした脳の状態を作り出す」。それができたら、人は勝手に上手くいく。放っておいても上手くいく。そんな状態になるのではないかなと思います。

気持ちが少しガチガチ系になっている時は、「エンジョイ」というキーワードを僕は使ったりします。楽しむことを思い出してもらおうということをして、「楽しいってどんな時なのだろう。」という問いかけをしたりします。楽しかったことを思い出してみるだけでもとても効果があり、自分の心をリセットすることができます。メンタル的に言うと、「エンジョイ」というのは心が整った状態と言われています。非常に集中している状態です。私たちは物事を楽しんでいる時に夢中になっています。これがメンタルで言うと、一番ブレていない状態になります。だから、実は「楽しい」は究極の心の状態なのかもしれません。ブレている時というのは、大きく分けると二つあります。一つは、過去に意識が向いている時です。もう一つは、心と意識が未来の不安を先取りしている時です。この「後悔」と「不安」が、我々の「二大ブレ」の要素ではないかなと思います。そう考えると、楽しんでいる時というのは、意識が過去や未来に行ってはいないし、今この瞬間に集中しているという状態を作っています。最近、アスリートがインタビューで「今日は楽しめました。今日は楽しかったです。」と答えることが

増えました。おそらく、こういう考え方が普及し始めたからではないかなと思います。

ベテランになればなるほど慣れ親しんできて、「いつも通りやればいい。」となってしまう。そこにスキが生まれ、緩みが生まれ、パフォーマンスが下がったりする時もあります。そういう時の意識づけの言葉として「チャレンジ」という言葉を使ったりします。結果だけを意識していくと人間は折れやすくなってしまいます。だから、チャレンジ目標を決めてそれをやり続けると、どんな展開だろうが最後まで粘り強く取り組みます。プロセスが大事なのです。仮に結果がでなくても、ほんの少しでも成長した所に気付くことができれば、心が折れずに維持できます。自分の中の緩みや過緊張みたいなものを上手く調整して、のびのびとワクワクとしながら楽しくチャレンジし続けていくと、人生がもっと楽しく、仕事ももっと面白くなると思います。

ルーティンという言葉、僕らは「心のスイッチ」と呼んでいます。スイッチは自分で入れる以外はありません。スイッチは全部内側についていると思ってください。だから、僕ら大人が外側から子供のスイッチを入れようとしても入りません。自分で入れるという習慣をつけてもらう。自発的に自分で自分のルーティンを作っていくことがお勧めです。

心を整える時に、まず一番大事なことは「身体」です。心と身体は同期しているので、心の状態を上げたければ、身体の状態を上げることが大事です。心の状態は、その人の身体に現れます。だから、身体を整えることで心を整えていくわけです。イチロー選手の打つ前や五郎丸選手がキックをする前は、身体を使うルーティンをしています。「身体を整えたら、気持ちも整った」ということが起きているのだと思います。身体の中でも一番情報量が多いと言われている顔から整えていくことがお勧めです。まず私たちから始めてみるのです。良い表情でいることによって、目の前にいる子供達の表情が変わっていきます。これを「鏡の法則」と呼びます。脳科学的に言うと、脳の中にあるミラーニューロンによって、私たちは目の前にいる人の影響を受けると言われています。よって、最初に整えるべきは「顔」です。何がなくとも笑顔というのが一番大事ということです。結局、笑顔というツールが一番のコミュニケーションの武器になります。心が開いている表情、穏やかな優しい笑顔、結局これに勝るものはないのです。良い表情で授業や指導していただけたら、とても良いのではないかなと思います。良い表情になるためのルーティンをしたいと思います。全力で「あっち向いてホイ」をします。可能な限り元気よくやってみてください。（「あっち向いてホイ」を20秒×3回実施。）

前後の自分は違いますか。明らかに脈拍やテンションが上がっています。それから大きな声で笑ったりしたので、リラックスして肩の力が抜ける感じがあったと思います。このように、何かをすることで自分の心を自分で変えることができることを子供たちに伝えています。これに気づけない方が非常に多いです。自分の心はいつも他者によって嫌な思いをするけれど、実は自分の心は自分で整えることができるのです。最初は意識しないとイケないけど、無意識にやれるようになる。良い習慣を手に入れると、人生は成功したといっても過言ではありません。

「姿勢」も大事です。前向きな姿勢をとると、脳にスイッチが入って前向きなことしか考えられません。苦しい時こそプラスな表情と姿勢が大事だと思います。まずは姿勢のスイッチ、パワーポーズをやってみましょう。それから、指導する側として、子供達の姿勢を見てみましょう。悩んでいる子は姿勢が悪い。何か心に引っかかるのがあるのだと思います。そこに気付き、声をかける。今、オンラインの仕事が多くなって姿勢を見ることができないので、表情を見るようにしています。作った表情ではなくて、ふとした表情を見るようにしています。影が差す時や、気になっている話題を話している時、表情が変わったりして、本音が出る時があります。表情や姿勢が心のサインになっています。

呼吸は感情を表していて、呼吸を整えると感情も整えられます。これはマインドフルネスや瞑想に結びついていくと思います。Google社には、社内に瞑想ルームがあるそうです。きっと日本の会社にもこのような会社が増えるのではないのでしょうか。心を整えることで、会社に貢献できます。幸せな心の状態で仕事をするのが大事と言われています。うまくいかない時はまず呼吸を整えましょう。大切なことは一度心を整理することで、一旦ゼロリセットすることです。深くゆっくり呼吸をすると地に足がついてきます。そして、「さあ、リセットをしよう一回行きましょう。」となります。東京・大阪・名古屋に住んでいる子供たちは、小学校5年生ぐらいからスケジュールが密になり、異常に忙しくて大変です。ピークは中学3年生頃で、習い事が多く、分刻みで動いています。子供たちはいつ心をリセットするのか？学校で静かな時間を少しでも作れると良いですね。

ヨーロッパのある国で、1時間目の授業を全部体育にしたところ、2時間目以降、集中力が増し、結果的に成績が上がったというデータがあります。まだ検証の途中だと思うので、今後どんなふうに扱うのかわかりませんが、身体を整えることがとても大事だということは間違いありません。

2つ目のルーティンは、言葉です。「言葉」＝「エネルギー」であるという考え方をすると分かりやすいです。

プラスな言葉やポジティブな言葉には、プラスでポジティブなエネルギーが含まれています。だから、プラスでポジティブな言葉を受け取った人は、プラスなエネルギーが注入される。心にあるエモーショナルな目盛りに気付くことで、プラスにすることができます。一方、マイナスな発言やネガティブな言葉を言われると落ち込みます。マイナスな言葉を言ったら必ず相手のエネルギーを奪うという原理を覚えておきましょう。ダメ出しをすると元気を失いますが、「自分のダメなところを教えてください。」の場合は話が違います。これはスイッチが違うからです。ダメ出しではなく、「もっと自分が上手になりたい。どこが足りないのですか。」という質問になるので、それに答えてあげてください。求められていないのに、「お前ダメだな、ここダメだな、あいつと比べても全然できてないよ。」と伝えると、落ち込みます。だから、指導は難しいのです。ダメなところを指摘すると、どんどんエネルギーを失い、結局やる勇気を失います。本当はやり直しをして欲しいのです。「これ違うからさ、もう1回やってみよう。」ということです。そうすると、もう1回やってみるエネルギーが必要になります。結局、やり直すエネルギーが無ければ、人は動きません。ではどのようにプラスな言葉、ポジティブな言葉を増やしていったらよいのでしょうか。まず1つは、マイナスな発言やネガティブな発言はダメという考えをやめてみることです。これこそ危険です。ネガティブやマイナスはダメというのは、マイナスに対するマイナスで、1番良くないことです。ダブル否定は、ある意味自分を否定していることになります。人間だから、弱音を吐いたり、面倒くさかったり、「またやっちゃった。」と思うことがあります。そういう自分を許してあげる、相手を許してあげる、そういう許容や、余裕というものが人間には必要なかと思います。自分を許してあげることが大事なので、まずは前提として、「これをやめましょう。」ではなく、「これを増やしましょう。」と、そのぐらい柔らかくすることが大切になります。

年を取ると教えたくなくなります。でも、「教えたい。」は非常に危険です。その人、その子の否定になってしまいます。そうではなく、ほんの少しでも「今日もプラスだったよ。」という人生でいいのでないかと僕は思っています。皆さんの周りでも、プラスな言葉やポジティブな言葉を増やしていきましょう。そして、言葉は「コミュニケーション」で使います。コミュニケーションというのは「誰かとのコミュニケーション」と、「自分とのコミュニケーション（セルフトーク）」の2種類があります。特に「自分とのコミュニケーション」が大事です。人には優しいのに、自分には厳しい人が多いと思います。これが、僕たちの最大のブレーキになっているのではないのでしょうか。敵は自分です。誰も言っていないのに、自分の心の中の呟きが、どんどん自分を責め始めていく。他人に優しい素晴らしい人ほど、自分に厳しいように感じます。もう少し自分にもプラスな言葉を、ポジティブな言葉を言ってあげませんか。寝る前に、自分にプラスの言葉を言ってあげると効果的と言われています。小さい子供の寝かし付けの時とか、今日これは楽しかったね、面白かったね、今日これ良かったねと言うと、すごくいい睡眠が得られます。

使いやすいプラスな言葉に「いいね。」という言葉があります。承認されると、少し嬉しいです。これが人を勇気づけるのです。そして、「ここ良かった。」と認めてあげてください。承認の言葉をどんどん話して、OKを出しましょう。僕は、子供たちに小さな丸をあげると言っています。日常の中に、小さな丸をつけるチャンスがいっぱいあります。それが自己重要感と自己肯定感に結びついていくと思っています。自分にOKを出すという癖をつけるために、我々大人がやるべきことは、その子に小さな丸をつけてあげることです。人間の短所を削るということは長所を削ることにつながります。短所は、簡単に削るものではないのです。人間は長所で尊敬されて、短所で愛されるものです。素晴らしい長所はみんなから尊敬されます。でも、その人の味わいとか、その人の面白さとかユニークさというのは、実はその人の少しだけダメなところ短所にあります。そこが人間らしい味わいです。短所も長所も丸ごと引き受けてあげることが大事です。そういう意味で、「いいね！」という言葉をやむを得ず使ってほしいと思います。コミュニケーションでは、リアクションをすることが大切になります。「そこは私やめてほしい。」「私ここオッケーよ。」とか、お互いが理解し合うために大事なことだと思います。（4～5人のグループで、一人一人が相手の長所を伝え、「いいね。」とお互いに伝えあうグループワークを実施。）

人間には、承認欲求があります。それは、マズローの5段階の欲求の自己実現に繋がっていきます。（その段階に行きたいのに行けないのは、やはり、どこかが引っかかって上手くクリアできていない部分があるからだと思います。「どうせできないし、やっても意味ないし。」となると、せっかく自分の中に浮かんだビジョンがすぐ消えてしまうことになりかねません。だから、小さな丸を付けることは、すごく大事だと思います。）

「ピンチはチャンス」と言うように、言葉の意味付けを変えてみる（リバース）方法もあります。チャンスはピンチの顔をしてやってくる。何かが進化する時は、たいがいピンチな状況です。ピンチの時ってあります。でも、広い目線で物事全体像を捉えてみると、大チャンスになるのです。コロナ禍や東日本大震災はとても大変でした。あの出来事が良かったということにはならないけれど、あの経験によって僕らも大きな教訓を得たのは間違いあ

りません。言葉の意味付けを変えてみる。視点を変える言葉がけというのも、私たち大人が手本を見せてあげなくちゃいけないことなのかもしれません。

メンタルリハーサルをすると、とても精度は上がります。野球の試合の前、選手たちはイメトレをします。ただ、イメージするのではなく、彼らは実際動き、筋肉や指先に記憶を結びつける（筋肉記憶）のです。メンタルリハーサルがうまくなると、本番で体が勝手に動きます。これが筋肉記憶なのです。ベテランになればなるほどいろんなこと想定できますよね。様々想定してイメージすると、プランAを走らせながら、上手くいかなかったらプランBというように、粘り強い良い仕事ができます。

最後にコーチングのお話をして終わりにします。コーチングを子供たちでも出来るように、シンプルな設計を試してみました。三角形を使って3つの質問をするだけでいいのです。1つ目の質問は現在地。「今の自分のことを知りましょう。」という質問をします。プラス面とマイナス面の両方を聴くことが大事です。僕は反省の文化に生きているので、ついマイナス面ばかりになりがちですが、良かったことや出来ている事もあります。だから、先にプラス面を聴くことがコツです。プラス面とマイナス面の両方をフェアに見て自己評価してみましょう。自分で自分のことを考え、今の自分のことをきちんと受け入れ、準備が整えば意識は未来へ向かいます。

2つ目の質問は、目的地、未来の自分です。「あなたはどうなりたいの。どんなことやってみたいの。どうしたらいい。」と、目的地を見つけていきます。向かう先がないと、エネルギーが出ない。やる気のスイッチは、目的地を決めることなのです。ここに向かうと決めたらスイッチが入る。「どこに向かったら良いか分かりません。」という人は、スイッチが入りません。ただし、目的地は絶対的でなくていい。仮でいい。とりあえず一旦決めてみましょう。大切なのは、行き先を決めてみることです。未来のビジョンを描く時に大事なものは、心のブレーキを外すことです。「できるわけない。無理。」というセルフトークは最大の敵です。未来のことを考える時は、ワクワクしながらやりましょう。できるかどうかではなく、やりたいかどうかの尺度で考えてみればいいのです。

3つ目の質問は、計画です。地図（アクションプラン）を作って、どういうルートで行くかを考えるお手伝いをします。1つや2つのプランではたどり着かないから、いろんなアプローチを考えてみます。だから、アイデアはすごく大事です。アイデアを出す時は、やるかやらないか？のフィルターにかけないということです。アイデアとして面白いと思ったらメモしましょう。やるかやらないかは後で決めればいいのです。最初からやるやらないかフィルターにかけると、アイデアは一気に出なくなります。

もし実行してみて、上手くいかなかったら、もう1回検証してやり直す。この粘り強い活動こそが、人を成長させるのだと思います。トライアンドエラーの法則、人が成長する過程はこれしかないと思います。そして、この小さなチャレンジに「いいね。」を送ってあげましょう。誰もまだ気づいてない小さなチャレンジに対して、拍手を送ってあげましょう。

現在地を特定し、目的地を決め、そこに行くための計画を一緒に作る。計画ができたら、一步踏み出していく。上手くいいたら次の一步へ。上手くいかなかったらもう1回チャレンジする勇気を与える。これがコーチングの全貌になります。人間は一人だと、小さな失敗でも挫けるものです。だから、コーチや先生が必要なのです。（2人1組となり、コーチングのグループワークを実施。）

チャレンジはとても価値があることだと思います。結果ではなくプロセスが大切ということです。上手くいいたら次へ行き、間違ったらもう1回考えてやってみる。粘り強く、粘り強く。そういうことが子供たちに伝われば、色んなことがあってもなんとかする子供になると思います。それが大事だと思います。諦めずに粘り強くやれる子供たちが育ってくれたら、先生としては最高じゃないでしょうか。そういう仕事を是非してほしいなと思います。

様々話しましたが、全部やろうとせずに、何か1つでもいいから試してみるということをお勧めします。いつかまた、どこかでお会いできたら良いなと思います。今日は最後まで聞いていただきありがとうございました。

司会者

ありがとうございました。皆さんの方から何か質問等ございませんか。

千葉学園高等学校：本城夏子

先生のお話を聞かせていただいて、高校野球を昨日も私見ましたが、やはりニコニコしてる生徒さんがとても多くて、今、どこのチームもそういう雰囲気、何か理由があるんだろうとは思っていましたが、先生の話をお聞かせいただいて、リラックスするっていう効果があるんだと思いました。各チームの監督さんも分かってらっしゃって、そのように生徒さんたちにご指導なさっているのだなと、なるほどなと理解ができました。

私達も、部活動を教えてる先生もいらっしゃいますし、看護科の生徒や学生が相手なので、やはり色々悩みが

あって、表情も「ちょっと暗いな。」とか、話す言葉も「ん？」って思うことが結構あるんですけども、そういう時私たちの方も、やはり粘り強く、ニコニコできるような関わりを持ち、生徒や学生が自分の気持ちを表現できてニコニコできるような、笑顔になれるような指導が必要なのだと、先生の話聞かせていただいて思いました。ありがとうございました。

司会者

それでは、令和5年度青森県高等学校教育研究会看護部会講演会を終了させていただきます。

研究協議

発表1

コロナ禍における基礎看護臨地実習の在り方

～看護実践能力を高めるための学内の取り組みについて～

千葉学園高等学校 相内 美羽

I はじめに

看護分野において、看護実践能力を高めるために臨地実習を行う意義は大きい。学習指導要領において、臨地実習は「知識・技術を看護実践の場面に適用し、看護の理論と実践を結びつけて理解できる能力を養う内容」とし、看護の実践能力を高めるための教育として実施されてきた。しかし、コロナ禍となってから、臨地実習が縮小・中止になることが多く、学内で実習内容を補う状況が続いている。学生たちからも臨床での学びが少ないまま医療現場に出ていくことに対して、不安な声を聞くことが多くなったと感じる。現場で実習ができないことに加え、医療技術の進歩、患者の高齢化や重症化、平均在院日数の短縮化等により、看護師の役割は複雑多様化してきており、よりレベルの高い看護実践能力が求められている。そのため、臨地実習ができない状況であっても、学内での取り組みを充実させ、医療現場に出た際にその能力を発揮できるように指導していかなければならないと考えている。また、今回の研究は、新型コロナウイルス感染症が終息した後も、学内演習や実習前の事前学習として活用できると考えている。

II 研究の概要

1 目的

学内実習での取り組みを生徒の視点で振り返り、看護実践能力を高めるための取り組みについて考察する。

2 対象

臨地実習と学内実習の両方を経験した高校3年生と専攻科1年生（計61名）

3 研究方法

学内実習、臨地実習に関するアンケート調査を実施。アンケート結果の統計から傾向を把握した。

[アンケート内容]

- (1) 臨地での実習を行ってみて、看護を提供する上であなたが必要だと感じた能力について
- (2) 臨地での実習中、自分が特に不足していると感じる能力について
- (3) 学内実習を通して特に身に付いたと感じる能力は何か、その能力を高めたと感じる取り組みについて
- (4) 臨地実習を通して、事前に行った学内実習の時に身に付けておきたかったと感じる能力について
- (5) 学内実習に求めることは何か（自由記載）

上記のアンケートへの回答として、看護実践能力を下記の12項目に分類した。

III アンケート結果

- (1) 臨地での実習を行ってみて、看護を提供する上であなたが必要だと感じた能力について

生徒の半数以上が看護をする上で必要だと認識している能力は、患者とのコミュニケーション能力、患者の疾患の状況を把握するための知識・考察力、患者の身体状況を把握するための観察力・フィジカルアセスメント能力、ケア中に患者の状況を見て臨機応変に工夫する能力であった。

生徒は臨地での実習で初めて患者さんと接し、コミュニケーション能力と、患者の状況を把握する能力、状況を見て対応する力が看護をする上で必要だと考えていることがわかった。

- (2) 臨地での実習中、自分が特に不足していると感じる能力について

生徒が不足していると自覚している能力は、患者とのコミュニケーション能力、患者の疾患の状況を把握するための知識・考察力、カルテなどから必要な情報を収集する能力、ケア中に患者の状況を見て臨機応変に工夫する能力、患者の身体状況を把握するための観察力・フィジカルアセスメント能力であった。

これは (1) の結果と重なる部分が多く、生徒は、看護をするうえで必要な力である、コミュニケーション能力や患者の状況を把握し考察する力が、不足していると認識していた。

(3) 学内実習を通して特に身に付いたと感じる能力は何か、その能力を高めたと感じる取り組みについて

(1) や (2) に挙がっていた項目の能力が身についたと感じている生徒が少ない。その一方で、報告・連絡・相談など、教員と生徒間のコミュニケーションや看護技術力は身についたと感じている生徒が多かった。また、図4より、状況設定をしながら実施したシミュレーション教育、カンファレンス、疑似カルテを用いた情報収集の取り組みが効果的だったという結果が得られた。

(4) 臨地実習を通して、事前に行った学内実習の時に身に付けておきたかったと感じる能力について

(1) 、 (2) と類似した結果が得られた。生徒たちは看護を行う上で必要だと感じている能力を、事前の学内実習で身に付けておきたかったと感じていることがわかる。

(5) 学内実習に求めることは何か (自由記載) 良かった点と改善点は下記の通りである。

IV 考察

看護実践能力を高めるための教育方法の1つとしてシミュレーション教育が主流になってきている。今回のアンケートからも、カンファレンスなどを通して、教員や生徒間でのコミュニケーション力が身についた、状況設定をした援助の取り組みや、援助後の振り返り・デモンストレーションの実施などによって基本的な看護技術が身についたと感じている生徒が多かった。しかし、アンケート (1) 、 (2) 、 (4) の結果より、生徒は看護をする上で、患者とのコミュニケーションや患者の状況を把握する力、考察する力、それをケアに活かす応用力が不足しており、今後の課題であると考えていた。学内実習での取り組みを通して、これらの能力が身についたと感じている生徒が少なく、今後対応方法を検討していきたい。

基礎看護学実習Ⅲの看護過程における到達目標は、「情報収集ができること」であり、高校2・3年生が患者の全体像を把握することは難しい。看護過程を学習した専攻科1年生の (5) の回答から、高校のうちからアセスメントについて学習したかった、患者の健康上の問題を把握できるようなカンファレンスの時間がほしかったなどの意見があった。また、実習中の生徒は、どのような情報がなぜ必要なかを理解せず、単にヘンダーソンの項目に沿って情報収集をしているため、援助に必要な情報が不足する傾向にあり、指導の見直しが必要だと感じている。

「アセスメント能力向上を目的としたシミュレーション教育に関する検討」(参考文献1)で、松田らは、アセスメント能力の向上には、シミュレーションの反復、事前学習やディスカッションによるフィードバック等を繰り返し行うことが重要で、これらの復習の機会を設けることで学習の定着に繋がることを示した。今回アンケートをとった生徒は、2～3回程度臨地実習の機会を逃し、学内実習で補っている。学内実習になるたびにシミュレーションの反復はできたが、看護技術などの実技に時間を多く費やしており、ディスカッションやフィードバックを繰り返し行うことができていなかった。看護過程の情報収集について指導する段階で、ケアを導き出すまでの過程を教員が生徒と一緒にディスカッションをする機会を設けることが大切である。そして、考えたケアを実施しながら、さらに情報を収集し、教員と共にケアにつなげる作業を繰り返していくことで、必要な情報とは何か理解できるようになるのではないかと考える。

コミュニケーションに関する学内実習の取り組みについては、iPadによる撮影とプロセスレコードの記載により振り返りは十分にできたという意見があった。また、(5)の結果から、患者とのリアルなコミュニケーションを求めている意見が多かった。患者とのコミュニケーション能力を向上させるためには、より現実に近い状況でやり取りをさせることが必要だが、教員が実地指導者・指導教員・患者などの複数の役割を担いながら、患者役としてよりリアルにコミュニケーションをとることは難しい。

白岩らの研究(参考文献2)に、「日頃から高齢者と接している生徒の方が、言葉に出せない気持ちを聞くスキルが高い」という記述があるように、日常生活の中で、同年代の人とのコミュニケーションだけでなく、高齢者などの年齢層が違う人と関わりを持つことでコミュニケーション力を身につけられると考える。しかし、生徒の生活環境をみると、核家族化が進み、祖父母と同居していない場合が多く、生徒自らその機会を設けることは難しい。また、普段から生徒の様子をみていると、SNSでのコミュニケーションが中心となり、対話をしながら交友関係を築くことを苦手と感じている生徒も多い。よりリアルなコミュニケーションをとる機会を作るために

は、5年一貫教育を活かし、実習経験が豊富な専攻科の学生にシミュレーションの患者役をお願いすること、実習先の病院や施設と連携し、リモートで利用者や患者とコミュニケーションをとることなど、検討していく必要がある。

また、友竹らの「コミュニケーションスキルを習得するための成人看護方法演習」（参考文献3）から、シナリオを作成して行うロールプレイングが、客観的に患者の反応を捉える力を伸ばし、生徒自身がコミュニケーションの課題を見つけるよい機会になったことがわかった。今回の実習では、プロセスレコードを用いた振り返りを行ったが、ロールプレイングを取り入れることで、患者に接したことがない生徒でも、患者や看護師、家族などさまざまな立場で物事を考えるよい機会となり、幅広い視点で患者を捉える力を育てることができると感じた。

V おわりに

臨地実習が中止になってから、生徒の看護実践能力を伸ばすため、臨地の状況に近づけて教育しようと努めてきた。しかし、研究を通して、臨地に近づけるだけではなく、生徒の状況に合わせて、何の能力を高めたいのか、その目的に沿った教育を行っていくことが大切であると感じた。また、学内の実習を臨地実習に向けた準備段階として行うことで、本来の臨地実習の目的である、「看護の理論と実践を結びつけて理解できる能力を養う」ことにつながり、効果的であると感じる。

学内での取り組みと臨地実習のメリットを十分に理解した上で、効果的な教育方法について、さらに模索していきたい。

発表2

主体的・対話的で深い学びを得るための

実習カンファレンスの進め方について

青森県立黒石高等学校 教諭 信濃 幸

I. はじめに

入院病棟の看護師が頻繁に行うカンファレンスとは、日々の看護ケアの問題点、治療上の問題点について意見を出し合い、解決策を見つけるために行うものであったり、勤務帯ごとの申し送りや看護チーム間の情報共有の場であったりと、患者に関わるスタッフの意思統一の意味も含めて行う。特に個別の対応が必要な患者に対して看護を展開する場合、看護師のスキルや感性によって、対応する看護師毎に看護ケアの内容に差異が生じる可能性がある。その際、カンファレンスを行い情報共有することで、看護師個人レベルでの差異をできる限り小さくし、スタッフ全体で同じ対応ができるようになる。看護師にとってカンファレンスとはただ参加するだけに留まらず、日々のケアに対して抱えている疑問について、カンファレンス内で意見を交わして解消しようとしたり、熟練者の経験に基づく知識や経験を継承したりすることで病棟チーム全体のスキルの向上を図る物であると考えられる。

では、学生におけるカンファレンスが持つ意味とはどのようなものか考えたとき、上記のような看護の向上を図るという側面の他に、生徒同士や病棟指導者との対話を通して、実際の臨床看護の現場で起こりうる問題に対する理解を深めるとともに、コミュニケーションや協働スキルを鍛え、生徒自身の問題解決能力を養うという目標を重視する必要があると考えられる。この目標を効果的に達成するために、主体的・対話的で深い学びを得られるような実習カンファレンスの場を整える事が教員の役割であるだろう。この協議を通してより良い実習カンファレンスの進め方を考えていきたい。

II. 実習カンファレンスの実際

各学年の実習における実習カンファレンスの状況について説明する。高校1年生は昨年度から新カリキュラムが開始となり病院における見学実習を行っている。その実習での学び（病院の特徴や構造、病棟毎の役割、看護師の役割など）を各自レポートにまとめて提出するため、実習中のカンファレンスや生徒同士で学びを発表し合う機会は特に設けていない。

高校2年生では病棟指導者のシャドウイングと入院患者とコミュニケーション実習を行う。この時の学びや病棟の特徴、実習を行う際の留意点などを実習グループ毎にまとめ、1学年の看護科生徒に向けて発表させる機会を設けている。

高校3年生から成人・老年看護学実習において受持実習を行い、実習最終日に受持患者の情報や実習中に体験した困難な事象について情報共有を行い、生徒同士で助言をし合うカンファレンスを行う。この際、病棟指導者

は交えず、校内で教員がファシリテーターとなって生徒同士の意見交換を促進する役割を担う。

専攻科1年生では、基礎看護学実習・成人老年看護学実習において受持実習を行う。基礎看護学実習では実習全体を通しての気づきや学びについて、病棟指導者を交えた振り返りの機会を設けている。成人老年看護学実習においては高校3年生のカンファレンスと同様に行っている。

専攻科2年生の臨地実習では受持患者の看護過程を展開していく。メンバー全員が受持患者の看護計画を紹介し、立案した看護計画に基づくケアの実践と計画の評価について発表するという流れになっている。この形態のカンファレンスを実施しているのは成人看護学実習、母性看護学実習、精神看護学実習、看護の統合と実践実習の4領域でこの実施方法をとっている。在宅看護学実習では、受持実習を行わないため、最終日に実習全体の学びについて実習指導者を交えて振り返りを行う。例外として小児看護学実習における実習カンファレンスでは、グループ内から1名の生徒の事例を取り上げ、ケアの実践の際に困難を感じた場面に対する解決策を検討するテーマカンファレンスを行うため、1つのテーマについて深く探究する機会が得られている。病院側指導者が生徒の看護観を理解したいという希望により、グループメンバー全員の看護計画を発表するカンファレンス形態をとっていることが多く、この形態における主体的・対話的なカンファレンスの運営が求められていると考える。

Ⅲ. カンファレンスにおける課題

このカンファレンスを主体的・対話的で深い学びを得るための場にするために以下の課題が挙げられる。

1. 生徒が看護計画を立案する事で精一杯となり、他のグループメンバーの症例・計画についての情報整理まで手が回らず、互いが抱える知識や疑問の共有に至りにくい
2. 病棟指導者の業務の合間にカンファレンスの時間を設けるため、実施時間が30分程度に限られ、グループメンバー全員の看護計画を発表するだけで時間が終わってしまい協議的な内容まで発展しにくい。

実習グループに配置される生徒の習熟度や性格によって多少の差異はあるが、以上の2点がどの実習グループのカンファレンスにおいても課題となっている状況である。この2点について、カンファレンスをより実りの多い物とするために実習指導の教員ができる働きかけについて先生方のお力をお借りしたい次第である。

- 1) 生徒が看護計画を立案する事で精一杯となり、他のグループメンバーの症例・計画についての情報整理まで手が回らず、互いが抱える知識や疑問の共有に至りにくい
- 2) 病棟指導者の業務の合間にカンファレンスの時間を設けるため、実施時間が30分程度に限られ、グループメンバー全員の看護計画を発表するだけで時間が終わってしまい協議的な内容まで発展しにくい

質疑応答

千葉学園高等学校：実際に学内実習は、緊張感がない。そこはすごくわかるが、高校の看護科以外の先生にバイタルサインを取りに行かせた時の反応はどうだったのか。それは自分で行きたい先生に行くのか。それとも教員側から誰々先生にと指示するのか。緊張感は出たのか、友達言葉で行くような生徒はいなかったのか。

応答：先生に触れるということ自体に躊躇があったりだとか、コミュニケーションも片言だったりとか、緊張で手が震える生徒もいて、初めて患者さんのところに行くという想定で緊張感を持たせることはできたのかな、と思う。授業の合間に空きのある先生に何時に来てもらえないか、というように実習室に10分とか20分だけとか、代わる代わる来てもらっていた。授業に来ている先生に当たった時にはそういう生徒もいたが、先生たち自身が、普段より緊張して入ってきて、緊張感がお互いに出ているようだった。

黒石高等学校：もう少し教えて頂きたい部分があるが、教員が患者役をされたということだが、どういう状況で、例えば1対1なのか、複数いてシミュレーションみたいに場面を設定して、そこに訪室して、はいスタートなのか。何か患者設定はあるのか。これからシミュレーションを学校でやろうと思っているので、参考したいので教えて頂きたい。

応答：1対1でやることが多い。これをやったのは、高校生がまず患者のイメージが全くできていなくて、本当は生徒が患者役をして、コミュニケーションをお互いに取りながら、目と目を合わせながらやってほしいが、そこがなかなかできないので、生徒は寝てもらって、頭元からコミュニケーションをこっちで喋っているような感じ行っただ。患者設定はペーパーペイシエントが1人につき1人ずつある、カルテとかそういうのも生徒がちゃんと情報を収集してから、患者さんの所に訪室する形です。

黒石高等学校：カルテとか作られたということだったが、どういう様式なのか。ペーパーで作ったのか、それとも電子カルテみたいに作ったのか。生徒は事前に紙カルテを見て、患者をイメージし、訪室したのか。

応答：ペーパーで作って、大体こういう風な情報を書こう、と指導者と検討して、同じような様式にみんなで打ち込みをして印刷かけて、紙カルテとして置いている。その時に、私たちから情報を少しずつ話の中から情報を

得られるようにした、今すぐ喉が痛いという情報をちょっと小分けに渡すようにして、問診を受けられるようにしている。

黒石高等学校：問診という場面か。iPadで撮影する。撮影部隊がいて、それを振り返りは後ほどやるのか。すぐやるのか。

応答：援助の時に今ちょっとお腹が痛いとか、陰部洗浄の時に腰が痛いという発言をして、コミュニケーションをとりながらケアする、という。後ほどやることの方が多い。ゆっくり見ている時間を設けることができないので、1日の中で技術をコンパクトに、次の患者でこれやってね、というのを伝えておいて、パーと実施して、その振り返りの時間で振り返りをしてという感じである。

黒石高等学校：アンケート結果を見て、コミュニケーション能力について生徒たちは、最初、必要だと思っていたののかというのと、私個人でいえば、看護師とのやり取りというのはすごく重要なかなと思っていたけれども、生徒たちは、そこはあまり重要とっていなかったけれど、成果があった、という感じでよかったか。

応答：実際には学内実習をやった後に臨地に出てみて、看護に必要な能力はなんだったのか、とか、不足していた能力はなんだったのか、という風なことになるので、学内での取り組みで報連相とか、教員だとかと、コミュニケーション能力が高まったという認識の後で臨地に行くと、実は、コミュニケーションとか状況把握の方が難しかったと思って帰ってきた生徒が多いような。

黒石高等学校：生徒の多くが、患者さんとのコミュニケーション能力はやはり重要だ、という風に、不足している、と認識していたようだが。3年生の能力的にコミュニケーション能力がどのくらいあればオーケーとするのかなと、先生達の中ではどのように位置づけをして生徒に指導されているのか。

応答：ここも難しいところではあるが、やはり、患者さんの気持ちを汲めない生徒が多くて、どうしても自己中心的なコミュニケーションの取り方とか、反応を見られないという生徒が多いので、つたない言葉でも患者さんを見て、患者さんに合わせてコミュニケーションをとろうとしていけばいいのかな、という風に私は思っているが。

黒石高等学校：何も言えなくて戻ってくる高校生も結構いたりはすると思うが、話せなかった、という風に思うのではなく、このことについて話したいな、とっていて、いいタイミングで話が出来たらオッケーなのか、その振り返りが教員として、それが出来れば、生徒も自信がつくのかなと思ったりして、ちょっと質問させていただいた。色んな生徒がいるのでコミュニケーション能力が出来ているとか出来ていないという判断は、何でじゃあ物差しを使えばいいのかな、というのは、すごく差が出てくる場所だと思って。

千葉学園高等学校：高校の方で実習を一緒にやらせていただいて、我々がやってきたのはこういうことだったのだな、というのをこうやって発表してもらったことで、すごく自分たちがしてきたことを見ることができた。あと、課題も挙げていただいて、これから何をしていくべきか、というのも少し考えさせられることがあった。相内先生が、これから考えた時に参考文献を見てこれからの対策をこう挙げていたのだが、個人的にオリエンテーションを主にやらせていただいているが、生徒たちが、ただただこう流れていってしまうところがあるので、これはあの時やったことだよ、という風に振り返り、念押しするタイミングをどんどん取っていききたいなというのが個人的な課題で、今年度から意識してやるようにはしている。高校2年生の時から、一応看護過程についてはフレーズをちょっと伝えて、患者さんの看護を導き出すということはもう観察から始まるし、情報を考えるということをしていくので、大筋だが看護過程をやっている。スタートの部分だが、それがいずれ専攻科に行ってもっと専門的になる、あの時オリエンテーションしたのが、この部分だよ、というようなことを念押ししていききたいのを考えていきたい。

黒石高等学校：素晴らしい発表を聞くことができ嬉しいなと思っているのですが、コロナ禍で大変な間にこれだけ、より良く出来ないかというのを考えて、実践するというだけでも凄いな、と東北大会の時から思っていた。次のカンファレンスの話題にもなるかもしれないが、班で話し合っている場面だが、進め方についてどのような感じで生徒の指導をしているのか、ただ話をしているのか、こういう感じでやるのだよと、要所所で伝えているのか、話をさせる流れをどのように作っているのかを教えていただきたい。

応答：主に司会とか進行は教員の方がやっています。先生によってはやり方が違うかもしれないが。私の班では、基本的に全員は援助を見ているような状況なので、必ず全員に意見、この援助をやった時に患者役はどう思ったのかとか、どこが良くて、こういうところをもう少し気を付けた方がいいのではないかと、というのを1人ずつに意見を出させて、その上で私自身が感じた振り返りを話して、次の援助みたいな感じで、1人1人の援助の振り返りを全員が必ず発言をするような形でカンファレンスをしている。

千葉学園高等学校校長：先生がアンケートを取った時に、自分で予測しながら、アンケート項目を作ると思うが、

大体予想通りだったのか。

応答：私の中では、学内実習で取り組んだ内容がもっと看護に必要な能力を高めたと結び付くのではと思った。私たちが一生懸命考えてやった演習だったので、それは生徒達のコミュニケーション能力と、状況を把握する力、というのが実習に不足していると思ったし、学内ではちょっと身に付きにくかったという結果だったので、そこが残念だったというか、予想外だった。教員はコミュニケーションをとったり、全体像を把握させるために一生懸命、個人的な指導もたくさんしてきたところだったので、アセスメントに繋がっていなかったりというのがあ

るのだなと思って結果を見ていた。

千葉学園高等学校校長：私も最近、コミュニケーション能力というのは、どこの科目でも、どこであってても幼稚園であってても大事だと思っている。例えば、先ほど柴田先生がどこまで行けば、という風なことをおっしゃっていて、私も、あ、と思ったが、明日から東京の幼児教育の学会に出るのだが、その学会の話の目的は『たどたどしく語る』という風な感じだが、その『たどたどしく語る』は、私たちがよく生徒が足りないとか、面接練習をもっとしてくれ、と頼まれている。高校生だったら、大人でも『たどたどしく語る』は、そこら辺はちゃんと生徒に伝えているのか。どういう風に伝えているのか、「ちゃんと、喋りなさいよ。」と言っているのか。どういう風に会話することがコミュニケーション能力を上げるのか教えていただければ。言わないとわからないのかな、と私自身も何となく。明日は『ただただどしく語る』ということができていけばオッケーだ、と言われて行くわけなので、たどたどしく話せばいいのだと自分では分かるが、そういう言葉が、今本当に使いすぎているので、ちょっとわからなくなっている。どういう風にどう話さない、と言っているのか。

応答：まずは、説明するのは看護師の義務としてあるので、援助する前に患者さんから同意を得ないといけないというのはあるが、患者さんの言葉にならない声を、反応を返すこともあるので、声だけ、言葉だけではなくてやっぱり非言語的部分を察知できる余裕がないと、患者さんの元にはいけない、というのはあって、やっぱり技術で一杯一杯になるとか、自分のことで一杯一杯になるのではなくて、そこまでちゃんと準備して、患者さんをまず観察して見られるようにしていけないといけない、という指導はしているつもりだが。

千葉学園高等学校校長：次に繋がるかもしれないと考えます。

司会：次に、信濃先生の発表について1番の議題について、生徒が看護計画を立案することで精一杯となってしまっ

て、互いが抱える知識や疑問の共有に至りにくいということがあがっているが、先生方はどのような工夫をされているか。

千葉学園高等学校：これはグループのメンバー中で看護計画を立てるのか。それは、実習何日目になるのか。看護計画を立案したものを実習日最終に発表することは、実施結果のSOAPは書いていない状況で発表するという

ことか。

応答：大体1グループ4人前後で、時間30分ぐらいで。実習の領域によっては、実習の日数が変わるが、大体最終日に行く。精神看護学だけが、8日間あって4日目に中間カンファレンスで最終日にやる。書いている。計画たてたものでやって、自分はこういう患者さんでこういう問題点で計画を立てて、実施して、こうだった、という感じで。資料としては、看護計画を出して、発表するのは評価という感じ。あなたの患者さんはこうなのか、という情報共有を図ったり、質疑応答したり、というカンファレンスをするのが慣例になっているので、千葉学園さんの方では、カンファレンス、テーマカンファをやっているのか、どういう工夫をされているのか情報を頂きたい。

千葉学園高等学校：成人と老年に関しては、実習3週あるが、1週目の金曜日、学内に戻ってきて学内で関連図のカンファレンスをする。その時は、グループメンバーで司会、書記やるのか。そのグループによって、先生方で進め方が違うと思うが。

応答：発表者に司会させたりしている。

千葉学園高等学校：その先生によってだが、私の場合、カレンダーの裏に大きく書いてきて黒板に貼ってカンファレンスさせているが、老年では、iPadを使って写真に撮ったものをスクリーンに出して、カンファレンスをする。後は人数分コピーしてきて渡す。聞くだけでどうしてもダメなので、やっぱり目に残して、それから聞いたものをそこにメモを取ってという風なカンファレンス。また、それを元に修正してきたものを2週目の火曜日に、実習場で、成人は、指導者さんといっても師長さん、師長補佐さんに参加していただいて関連図カンファレンスをする。老年は指導者さんにはいってもらって。30分の予定だが、指導者さん、師長さんの熱が入ると1時間超えて指導していただいている。そこでは、やはり、発表だけじゃなくて、質疑応答、ということで、昼休みにシナリオではないが、グループメンバーの中で、私こ質問するから、と言うと、本番の時に質問するとすぐに答えて、段取りとったでしょ、みたいな感じのカンファレンスの内容になったりもするが、意見交換がないカ

ンファレンスではなくて活発になるように進めてはいる。最終日にはサマリー発表をしていた。指導者さんがいる時もそうだが、日々のカンファレンスもそうだが、司会者と書記が準番にあたっていてということで進めている。日々のカンファレンスは、お昼までに担当教員に「今日、このことについてカンファレンスしたいと思います。」と議題を発表する。

応答：実習の中で大体3回。

千葉学園高等学校：実習では、指導者さんに入ってもらうのは、成人は2回、老年は毎日。

黒石高等学校：日々のカンファレンスもあるということだが、すごい。

司会：そろそろ時間となりました。相内先生、信濃先生ありがとうございました。

信濃先生：他の学校さんのカンファレンスの持ち方聞いて、基本的なことが抜けていたなど。学生同士情報共有する場面が確かになかったな、と。生徒同士が、例えば空き時間で記録やっている時に、お互いの患者さんのことで困っていることを話し合う時間が取ればもっと違ってくるのかな、と思う。学生同士の情報共有の場をなるべく設ける、千葉学園さんのカンファレンス、実習の持ち方を聞いて、取り入れやすいなというのと、来週からまた精神看護学実習に行くので、そこで、実践してみたいなと思った。

部 会 の 動 き

- | | |
|-------------------------------|---|
| 令和5年 5月11日 (木) | 高教研第1回理事会
(青森市・青森県総合社会教育センター) |
| 令和5年 5月18日 (木) | 青森県高等学校教育研究会事務局長会議
(紀要編集及び会計事務について)
(青森市・青森県総合社会教育センター) |
| 令和5年 6月22日 (木)
～ 6月23日 (金) | 全国看護高等学校長会 東北地区協議会理事会
(山形市・やまぎん県民ホール) |
| 令和5年 8月 3日 (木)
～ 8月 4日 (金) | 第54回全国看護高等学校研究協議大会
(鳥取県米子市・米子コンベンションセンター) |
| 令和5年 8月17日 (木) | 青森県高等学校教育研究会 看護部会研究大会
(青森市・青森県総合社会教育センター) |
| 令和5年11月29日 (水) | 高教研第2回理事会
(青森市・青森県総合社会教育センター) |
| 令和6年 2月中旬 (予定) | 会計監査
(黒石市・黒石高等学校) |

研 究 テ ー マ

紀 要 (集)	年 度	研 究 テ ー マ	会 場	会員数 (一・ 二希望 計)	大 会 参 加 数	大会 発表 者数
48	15	本県の高校看護教育のあゆみと新たな役割をみつめて	黒 石 市 津軽伝承工芸館	26	24	5
49	16	新学習指導要領を踏まえた看護教育のあり方を考える ー新たな看護教育の実践を模索してー (全国看護高等学校研究協議大会)	福島県郡山市 郡山ビューホテル	19	全国240 (県内 9)	2
50	17	看護基礎教育の充実・あり方を考える ー看護過程の効果的な指導方法を模索してー	青 森 市 県総合社会教育センター	21	17	1
51	18	自ら学び考える力と豊かな心を育てる看護基礎教育 ー新たな看護教育を実践してー	黒 石 高 校	21	17	3
52	19	進展する社会に対応した看護基礎教育のあり方を考える ー看護実践能力の向上を目指してー	弘 前 市 弘前パークホテル	22	25	2
53	20	臨床実践能力を育てる看護基礎教育のあり方 ー看護基礎教育の充実ー	青 森 市 県総合社会教育センター	21	16	2
54	21	新カリキュラムに対応した看護教育のあり方を考える ー臨地実習の充実をめざしてー	青 森 市 県総合社会教育センター	21	18	2
55	22	実践力・応用力を育てる看護基礎教育のあり方	青 森 市 県民福祉プラザ	21	21	4
56	23	看護実践能力を育む効果的な指導のあり方	青 森 市 県総合社会教育センター	23	20	4
57	24	判断力・実践力を育む看護基礎教育の充実を目指して	青 森 市 県民福祉プラザ	22	21	2
58	25	高等学校における看護基礎教育に求められるものを考えるー 看護実践能力の向上を目指してー	黒 石 高 校	22	17	2
59	26	看護のスペシャリスト育成を目指して ー今、求められる看護実践能力ー	青 森 市 青森県立図書館	21	18	2
60	27	社会のニーズに応えられる看護基礎教育の充実を目指して	青 森 市 県総合社会教育センター	26	19	3
61	28	看護の発展を支える人材育成を目指して	青 森 市 県総合社会教育センター	24	21	3
62	29	看護の発展を支える人材育成を目指した看護基礎教育の実践	八 戸 市 八戸パークホテル	24	30	2
63	30	高等学校の看護基礎教育における新しい時代に求められる 資質・能力の育成 ー主体的・対話的で深い学びを通してー	青 森 市 青森県立図書館	22	21	2
64	1	在宅看護論及び在宅看護実習の現状と課題	青 森 市 県総合社会教育センター	22	17	2
65	3	看護を創造する能力を育む看護基礎教育の実践 ー多様性・複雑性に対応できる教育方法の研究ー	青 森 市 ホテル青森	25	全国136 (県内38)	5
66	4	看護師国家試験対策	八 戸 市 千葉学園高等学校	23	20	3
67	5	「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた 高等学校における看護基礎教育のあり方	青 森 市 県総合社会教育センター	24	20	2